保育実習Ⅱ後の振り返りからみる事前・事後指導のあり方の検討

香　﨑　智郁代・永　野　典　詞

A study of Childcare Practice Guidance from the Reflection of Child care and Education Training Ⅱ

Chikayo Kouzaki and Tenji Nagano

１．はじめに

本稿の目的は保育実習後における学生の振り返りから、本学学生の実習に対する学びや改善点を明らかにし、保育実習指導Ⅰ及びⅡ（以下、それぞれ実習指導Ⅰ、実習指導Ⅱと略）の事前・事後指導の在り方を検討することにある。

保育実習は、「その習得した教科全体の知識、技能を基礎とし、これらを総合的に実践する応用能力を養うため、児童に対する理解を通じて保育の理論と実践の関係について習熟させること」[1]が目的とされたものである。実習を通して、学生は実際の保育現場において子どもと保育者の関係を観察し、養成校で学んだ知識や技術を再確認したり、時には修正したり、検討したりする。そのような実際の保育現場における様々な体験が、保育の専門性を確実に習得していく重要な機会となっている。すなわち、そこには養成校での学びだけでなく、保育現場の学びだけでもない、「往還性の原則」[2]が必要とされる。この養成校と現場での両方の学びについて、網野ら[3]は、「…保育とは何か、保育士とは何かを確かめ、その意義を深める実に多くの機会を提供してくれる。実習の体験を積み重ねていくことにより、保育士をはじめとする施設職員の保育や保護者に対する支援を観察し、その実際を体験することによって、その重さや厳しさも実感するとともに、ときには保育の真髄を垣間見ることができる。」とその重要性について述べている。つまり、養成校内での学びと実習という現場での学びのいずれもが保育士を目指す学生にとって必須であり、両方における学びがうまく機能するときに初めて学生の充実した学びがあるといってよいだろう。

養成校内での学びと言っても保育原理、教育原理といった保育の本質・目的に関する科目や保育の心理学、子どもの保健といった保育の対象の理解に関する科目、また保育の計画と評価といった保育方法や内容に関する科目など、その内容は多岐に渡り、いずれも欠かすことのできないものである。なかでも実習にあっては、その目的や自らの課題を明らかにするとともに、実習中の記録や内容を見直し評価し改善していく時間として、養成校内で行われる実習指導Ⅰ、および実習指導Ⅱがある。これらの科目をなくしては養成校と現場での学びの「往還性の機能をうまく発揮することが難しい」[4]と指摘されるほど、実習において最も重要な科目である。本稿では、本学における実習指導ⅠおよびⅡにおける内容の充実を図るために、現在の事前・事後指導の在り方について検討をしていきたい。

２．保育実習指導Ⅰ・Ⅱの概要

ここでは、本学の実習指導Ⅰ、Ⅱの概要について触れておく。本学の保育実習は、必修実習である「保育実習Ⅰ」（保育所実習、施設実習）、並びに「保育実習Ⅱ」（保育所実習）と「保育実習Ⅲ」（施設実習）のいずれかから選択する選択実習がある。近年、ほぼ全ての学生が保育所での実習を希望することから、実習時期としては、保育実習Ⅰ（保育所）が２年次の２月、選択必修実習である保育実習Ⅱが３年生の２月～３月に実施しており、ほぼ全ての学生がその時期に実習に出向くことになっている。

本学における「保育実習Ⅰ」のねらいは、「保育所の生活に参加し、乳幼児の理解を深めるとともに、保育所の機能とそこでの保育士の職務について学ぶ」ことであり、具体的内容は①講話による学び（園長先生や担当の先生方からの講話から学びを深める）、②観察実習（子どもとは直接的にかかわらないが、保育所にかかわる人・物・環境について観察をとおして学ぶ）、③参加実習（担当保育士の指示のもと、子どもと直接ふれあう）、④部分実習（担当保育士の指示のもと、部分保育指導案を作成して保育を展開する）、⑤反省と課題の明確化（実習の自己評価を行い、保育実習Ⅱへの課題を明確化する）

さらに、２回目の実習「保育実習Ⅱ」のねらいは、「①保育所の保育を実際に実践し、保育士として必要な資質・能力・技術を習得する。②家庭と地域の生活実態にふれて、子ども家庭福祉ニーズに対する理解力、判断力を養うとともに、子育てを支援するために必要とされる能力を養う。」であり、具体的内容は次の５点を挙げている。すなわち、①講話による学び（園長先生や担当の先生方からの講話から学びを深める）、②観察実習（様々な子育て支援事業等、実習園の取り組みを、観察を通して学ぶ）、③参加実習（担当保育士の指示のもと、子どもと直接ふれあう）、④部分実習（担当保育士の指示のもと、部分保育指導案を作成して保育を展開する）、⑤反省と課題の明確化（実習の自己評価を行い、今後の学びへの課題を明確化する）である。

そして、これらの事前指導として実習指導Ⅰを実施している。実習指導Ⅰでは、保育実習に向けてマナーや言葉遣い、立ち居振る舞いなど実習生としての基本から、実習記録、保育指導計画の書き方などを学び、模擬保育を通して保育指導計画の立て方や子どもへの援助方法、関わりを学ぶことを目的としている。また、実習指導Ⅱにおいては保育実習Ⅰの振り返りから自己評価の時間を設け、今後の課題の明確化した上で、部分保育及び一日保育に向けて指導案の作成と必要な教材作成に取り組み、再度模擬保育を実施しながら保育の知識と技術を培うこと、さらに、保護者支援についての学びも深めることを目的としている。この模擬保育においては、保育士役と子ども役とに分かれて保育を行うことによって、子どもの視点から見た保育士の言葉かけや進め方は適切か、教材づくり等の準備の在り方などをお互いに意見し合えるように、適宜コメントシートなどを利用しながら学びを深めている。

３．研究の目的

本研究では、保育実習後の学生の振り返りレポートから実習における学生の学びを評価し、事前・事後指導の課題を明らかにし、質の向上を目指すことを目的とする。

４．研究の方法

(1)　調査対象：「保育実習Ⅱ（保育所実習）」を終了した４年生30名（男子２名、女子28名）であった。

(2)　調査方法：実習指導Ⅰにおいて、実習後の振り返りと自己評価を行う目的で、レポートの提出を求めた。自己評価として提出を求めた内容は、「①自分の実習目標、②実習を通して学んだこと、実習内容として良かったと思えること、③実習を通して学べなかったこと、実習内容としてできなかったと思うこと、④今後の課題」の４点であった。

(3)　調査時期：2018年４月であった。

(4)　倫理的配慮：成績には一切影響しないこと、また調査内容は研究及び、今後の事前・事後指導の改善に使用することを説明した。

(5)　分析方法：提出を求めた自己評価の②実習を通して学んだこと、実習内容としてよかったと思えること、及び③実習を通して学べなかったこと、実習内容としてできなかったことに関する記述内容についてKJ法を用いて分類し、分析及び考察を実施した。

５．結果

(1)　実習を通して学んだこと、実習内容としてよかったと思えることについての記述内容をカテゴリー化したところ、ⅠからⅥの６つの大項目、そして12の小項目に分類された。結果を表１に示す。表内の各項目の括弧内は学生によって挙げられた項目数を示している。学生には回答数に制限をつけず、自由に記述してもらったことから、記述数は回答者数と異なっていることを付け加えておく。では以下

表１．実習を通して学んだこと、よかったと思えること

	大項目	小項目	記述内容一例
Ⅰ	援助技術（52）	子どもとのかかわり（26）	・目立つ子どもばかりではなく、いつも大人しく活動している子どもにも目を向け、しっかりと声掛けを行うことができた。 ・喧嘩の仲裁をすることが多々ありましたが、それぞれの子どもの気持ちを聞いたうえでその気持ちに共感し、解決につなげることができました。
		絵本・手遊びの実践（14）	・子どもを前にして、絵本の読み聞かせや手遊びをして子どもの笑顔や感想を聞けた。 ・年齢に応じた絵本の選択ができた。
		観察を通して（7）	・トラブルが起きた時の対処方法や子どもとの関わり方を見て学び、実際に学んだことを実践に取り入れトラブルを解決できたこと。 ・実習中に箸と歯磨き指導が始まり、貴重な保育者の指導の仕方と一生懸命練習している子どもの様子を見ることができ、勉強になった。
		指導者からのアドバイス（5）	・先生方のアドバイスをもとに、個人の性格に合わせた指導にチャレンジすることが出来た。 ・担当の保育者が部分保育を行う前に「最後まで指導案通りに進めようとせず、子どもたちのペースや発言に合わせてゆっくり時間も使っていいよ」と声をかけてくださったので私自身が考えていた形通りに進めることが出来た。
Ⅱ	子ども理解（10）	子どもの成長（8）	・前回の実習で0．1歳児クラスを担当させて頂いたため、今回2歳児クラスで実習させて頂き、1年間の成長を感じることができた。身体面はもちろん、基本的生活習慣や、言語の発達も実際にかかわり、感じることができうれしかった。
		子どもたちの様子（2）	・ひな祭り会や卒園式の練習など、行事に参加する子どもたちの様子を見ることができた。 ・発表会前は練習で忙しい雰囲気もありましたが、子どもたちは楽しんで主体的に練習に取り組んでいました。（途中省略）子どもたちが主体的に活動に取り組むためには、自分のアイディアが形になることや物語に興味を持つこと、自分たちが作り上げたという気持ちが大切だと学びました。
Ⅲ	実習態度（10）	手作り教材・ピアノ等の事前準備（8）	・ピアノの課題を事前に練習し、うまく弾くことができた。 ・製作活動の導入としてエプロンシアターを行い、興味を引くことができた
		気持ちの余裕（2）	・2回目の実習ということもあり、1日の流れを把握することから始まる実習ではなく、余裕をもって学びに繋げることができました。 ・2回目ということもあり、前回よりも心にゆとりをもって実習自体を楽しむことが出来た。
Ⅳ	保育士の職業理解（8）	保育者の思いや苦労（4）	・発表会前の忙しい時期の保育と進級に向けて準備する時期の保育を見ることができました。 ・お誕生日会に参加し保育者の様々な準備や苦労を知ることが出来た。
		保育者としての仕事（4）	・保育者としてのイメージを持つことや、これからの改善点や学んでいくべきことに気づくことができた。 ・保育者同士の信頼が職場の環境や子どもたちが過ごす環境に大きく影響するということを感じた。
Ⅴ	保護者支援・子育て支援（1）	保護者との関わり（1）	・保護者とのかかわりに関しては、先生方のかかわり方を観察する中で、笑顔で挨拶を交わしたり、少しだがお話しさせていただくこともできたり、毎日とても充実した実習だった。
Ⅵ	その他（7）	実習日程（7）	・早めに部分実習の日程を教えて頂いたため、その日に向けて少しずつ準備物を揃える事が出来ました。そのため、準備で焦る事なく活動中の段取りや流れの確認も出来ました。

にそれぞれの内容について説明していく。

まず、「Ⅰ　援助技術」は、記述数が52と「学んだ、よかったこと」として一番多くの記述がまとめられた。内容は、子どもへの援助の仕方についての学びがあった、あるいは学生が実習のなかで実施できた項目についてまとめたものであり、小項目である「子どもとのかかわり」「絵本・手遊びの実践」「観察をとおして」「指導者からのアドバイス」がまとめられた。

「子どもとのかかわり」は記述数が26と一番多く、その具体的内容として「子ども１人ひとりの応じた言葉かけや対応をすることできた、子ども１人ひとりと丁寧に関わることができた、笑顔でコミュニケーションをとることができた」等、子どもたちと関

わることができたことを評価している学生が多く見受けられた。次に、「絵本・手遊びの実践」は「年齢に応じた絵本の選び方を学ぶことができた、大型絵本や紙芝居などを読む経験ができた」といった子どもを目の前にした絵本読み等の実践機会を評価している様子が見えた。「観察を通して」は、「保育者の子どもとの関わり方をよく見て学んだ、子どもの年齢に応じた保育者の対応について学んだ」など実際に保育者の援助方法や内容、言葉かけを観察することによって、様々な学びがあったことが評価されていた。「指導者からのアドバイス」は、「指導者からのアドバイスを基に関わりを工夫することができた、反省会の中で多くの質問をし新たな学びに繋げることができた」など、実習担当者である保育者から随時指導を受けることで学びになったことが評価されていた。

次に、「Ⅱ　子ども理解」は、保育所での子どもたちの様子や子どもの発達段階について理解できたと評価されたものである。小項目である「子どもの成長」と「子どもたちの様子」がまとめられた。

「子どもの成長」とは、「１年前に担当した子ども達の成長を感じることができた、見た目の成長だけでなく心の成長まで見て感じることができた」等、今回の実習のみでなく、前回の実習時と比較して発達がどのように進んでいるかを理解することができた点について評価をしていた。「子どもたちの様子」については、通常保育だけでなく、ひな祭りや発表会などの行事前後における子どもの様子を観察、理解することができた点を評価していた。

「Ⅲ　実習態度」は、実習における学生の姿勢について示したものであり、「手作り教材・ピアノ等の事前準備」と「気持ちの余裕」という２つの小項目をまとめたものである。「手作り教材・ピアノ等の事前準備」については、オリエンテーション時で与えられた課題曲の弾き込みやエプロンシアター、手袋シアターなどの事前準備を行うことができたという点を評価していた。「気持ちの余裕」では、同じ保育所での２回目の実習ということから、保育の一日の流れや担当保育者、子どもたちに慣れていることで気持ちにゆとりを持って実習を実施することができた点を評価していた。

「Ⅳ　保育者の職業理解」は、保育士としての仕事の困難さ、責任の重さについて理解することができたという点が評価されたものである。小項目としては、「保育者の思いや苦労」「保育者としての仕事」の２つがまとめられた。「保育者の思いや苦労」では、発表会、誕生会、ひな祭りなど行事を通して子どもたちに体験して欲しいという保育者の意図や行事ならではの準備の難しさを体験できた点を評価していた。次に「保育者としての仕事」では、一つ一つの細かな子どもへの援助だけでなく、保育者同士の信頼関係や職場環境の良し悪しが子どもの保育環境にも繋がることへの学びや、今後保育者として働いていく者として、保育者の仕事イメージや自らの改善点を明らかにできた点が評価されていた。

「Ⅴ　保護者支援・子育て支援」は、子どもへの援助だけでなく保育所へ子どもを通わせている保護者への対応方法について学ぶことができた点が評価されていた。これは、記述数１であり、多くはないが担当保育者と保護者とのコミュニケーションの観察から実際に自らもコミュニケーションをとることができた点を評価していた。

最後に、「Ⅵ　その他」は、あらかじめ実習園から実習全体のカリキュラムや一日保育、部分保育等の日程を早い段階で示されていたことについて、評価をしていたものである。一日保育、部分保育等においては、指導案やそれに関わる製作物等の準備が必要であることから、早い段階で実習日程の詳細を伝えられていることについては実習園に向けた評価として挙げられていた。

(2)　次に、実習を通して難しいと感じたこと、できなかったと思うことについての記述内容をカテゴリー化したところ、ⅠからⅣの４つの大項目に分類された。以下にそれぞれについて説明する。

「Ⅰ　援助技術」とは、保育のなかで必要とされる技術をまとめたものである。なかでも「保育指導計画の立て方・進め方」については記述数が25と一番多く挙げられていた。これは、「そのクラスにあった段階での保育内容がしっかりと構成できるようにしなければならないなと感じた、子どもの行動や発言を予測し、細かな計画を立てることができていなかったことを実感した」等、部分保育や全日保育に必要とされる計画立案にあたって、子どもの発達段階に即した立て方や進め方ができなかったと評価が見られた。「子どもへの言葉かけ」では、「子どもに届くような声を出すこと、子どもたちを落ち着かせ引き付ける言葉掛けがうまくできず、自分自身

の声が届かない場面が多くあった、大きな声に任せてしまうことも多かったため、声の大きさの工夫や声色を変える練習が必要だと感じた」等、言葉かけの内容だけでなく、声の大きさや声色などの工夫も必要だったと評価している点が見えた。「絵本・手遊び・ピアノ」は「子どもたちをいかに話に引き込ませるかが難しい。しやすいように簡単な説明やイラストを入れることもとても大切だと分かった。子どもたちが興味を持ち、理解し想像力を膨らませることができるような絵本を選ぶことが重要だと感じた、緊張していても間違えずに弾けるように沢山練習することはもちろん、実習でピアノを弾く機会をもらい、場数を踏むことも大事と感じた」など、絵本の選び方や読み方、読むあるいは弾く上での緊張感の持ち方などが難しいと評価している様子が見えた。「全体に向けた関わり」では、「できないことや心配な子どもに目がいきがちになってしまった、少し手がかかってしまう子どもばかりになっておとなしい子どもやいつもよくできている子どもには目がいかなかった、目の前のことに一生懸命になり、全体を見れていなかった」等、集団に向けた対応が難しかった、できなかったと評価している様子が見えた。

「Ⅱ　子ども理解」とは、子どもの発達段階の理解や体調についての理解、障がいの知識、理解などをまとめたものである。「トラブルについて」は、子

表２．実習を通して難しいと感じたこと、できなかったと思うこと

	大項目	小項目	記述内容一例
Ⅰ	援助技術（60）	保育指導計画の立て方・進め方（25）	・部分実習中に緊張して計画通りに進めることができなかった。 ・子どもの行動や発言を予測し、細かな計画を立てることができていなかったことを実感しました。普段の保育者の声掛けや行動には、子どもの行動や発言、子どもの実態や発達段階を予測しての様々な意図や思いがあることを、明確に観察することができていなかった。
		子どもへの言葉かけ（20）	・子どもが制作する姿や完成したものに対しての言葉掛けが「出来たね」や「すごいね」など単調になってしまい具体的な言葉掛けが出来なかった。 ・子どもたちを落ち着かせ引き付ける言葉掛けがうまくできず、自分自身の声が届かない場面が多くあった。大きな声に任せてしまうことも多かったため、声の大きさの工夫や声色を変える練習が必要だと感じた
		絵本・手遊び・ピアノ（9）	・絵本の読みきかせでは読み込みが足らず、淡々と進む場面があったので、もっと読み込んで声色で表現できるようにしっかりと練習していきたい。 ・（排泄や準備等を）早く済ませ待っている子どもが飽きずに待つことのできるゲームや手遊びのレパートリーを増やす必要があると感じた。
		全体に向けた関わり（6）	・「先生」と声をかけてきてくれる子どもにばかり目がいってしまって、全体に目を向けることの難しさを感じた。 ・できないことや心配な子どもに目がいきがちになってしまいました。少し手がかかってしまう子どもばかりになっておとなしい子どもやいつもよくできている子どもがあまり見られませんでした。
Ⅱ	子ども理解（17）	トラブルについて（9）	・子ども同士のトラブル、けんかに呼ばれることが多く、その対応が難しかった。子どもにわかりやすく伝えること、何が良くなかったのか・どうすれば良かったのか等、子どもが理解できるように話すことが必要だと思った。 ・年齢によっての仲裁の仕方の違いや子どもに合わせた言葉の掛け方がとても難しかった。
		安全管理（5）	・活動を進める中で、楽しむということに重点を置いてしまい安全面にあまり配慮できていない部分があった。 ・子どものいつもと違った行動や顔色に気づき、体調の良し悪しを疑う判断です。子どもの肌に触れても熱があるかどうかが分からず判断出来ませんでした。
		障がいについて（3）	・障害をもった子どもへの対応や関わりが甘く、浅い関わりとなってしまったことです ・発達障害ときいて、少し身構えてしまっている自分がいたり、中々集団行動ができない子どもに対して言葉かけのみで動かそうとしていた・・（途中略）。
Ⅲ	実習態度（4）	体調管理（3）	・体調管理ができなかった。 ・体調管理をどんなに気をつけていても子どもから、風邪をもらったりして、完璧な状態で実習をすることができず、体調管理があまかったということです。
		積極性（1）	・失敗したらどうしようという思いから、なかなか機会を頂きたいと言い出せなかった。後半になってお願いをし、上手く弾くことが出来たが、もっと早い段階で依頼するべきだったと思う。
Ⅳ	その他（2）	体験の乏しさ（2）	・園全体が忙しく1日保育をさせて頂く時間をもらえず、読み聞かせや手遊びのみとなってしまったことです。 ・ひとつのクラスでの時間が2日間ずつだったため、普段の実習と比べて名前を覚えたり、子どもの特徴を知るのに時間が足りなかった。

注：（　）内は文意がわかるように筆者が加筆

どもの発達に即したトラブルの仲裁の仕方や伝え方が難しい、子どもに合わせた言葉かけの仕方が難しかった」等、子どもの年齢に応じた対応や１人ひとりに合わせた言葉の選び方など子ども理解が必要だったと評価していた。「安全管理」は、「視野を広く持ち、子ども一人ひとりの動きを把握して、危険が及ばないよう配慮するべきだと感じた、普段と違った雰囲気や流れの中で保育を行う場合には、いつも以上に子どもの動きに注意しておく必要があると感じた」等、子どもの体調不良への理解や子どもの活動の様子を理解しておくことの必要性を感じている記述が見られた。「障がいについて」は障がいの知識不足であったり、対応の難しさだったりを感じている様子が見えた。

「Ⅲ　実習態度」とは実習に対する姿勢についてまとめたものである。「体調管理」は、実習に向けての体調管理ができておらず、体調を崩してしまった点ができなかったこととして挙げられていた。「積極性」では、実習に向けて積極的になれなかったことを評価していた。

「Ⅳ　その他」は、「体験の乏しさ」であり、これは学生本人の反省ではなく、一日保育の機会がなかったことやじっくり子どもと関わる時間がなかったと評価していることとしてまとめられた。

６．考察

ここでは、保育実習Ⅱのねらいに即して、結果(1)(2)を考察していくこととする。

先述したように、本学における保育実習Ⅱにはねらいとして「保育所の生活に参加し、乳幼児の理解を深めるとともに、保育所の機能とそこでの保育士の職務について学ぶ」、そして具体的目標として次の５点が掲げられている。すなわち、①講話による学び（園長先生や担当の先生方からの講話から学びを深める）、②観察実習（様々な子育て支援事業等、実習園の取り組みを、観察を通して学ぶ）、③参加実習（担当保育士の指示のもと、子どもと直接ふれあう）、④部分実習（担当保育士の指示のもと、部分保育指導案を作成して保育を展開する）、⑤反省と課題の明確化（実習の自己評価を行い、今後の学びへの課題を明確化する）である。

これらのねらい、具体的目標に即して結果をみると、①講話による学びについては、実習の評価として多く挙げられた「Ⅰ　援助技術」のなかの「指導者からのアドバイス」に見られる毎日の反省会での担当者からの指導は、学生にとって学びになることが挙げられており、今日の自分の子どもとの関わり方等を振り返る貴重な時間となっていることが窺えた。また保育時間中においてもその都度実習担当保育士から直接説明を受けたり声をかけられたりすることで、気持ちの余裕ができたり理解が進んだ様子も見えたことから、長時間の講話という形式に関わらずコミュニケーションをとる時間の大切さが窺えた。次に②観察実習については、「Ⅰ　援助技術」のなかの「観察を通して」では、子ども同士のトラブルへの対処法や保育士の指導の仕方を学んでいることや、「保育士の職業理解」のなかで行事や誕生会など通常保育とは異なる形態での保育を観察することで、そこにおける子どもの様子や保育士の配慮点を観察し学んでいる様子があった。また、数は少なかったが保護者支援、子育て支援についても登園・降園時の保育士と保護者との関わりの様子を観察することで学んでいることがわかり、様々な学びがあったことが窺えた。③参加実習については、「Ⅰ　援助技術」「子どもとのかかわり」でも明らかなように、様々な子どもたちとのかかわりができ、さらに絵本や手遊びなどを実践することでも直接触れ合うことができたことがわかる。その反面、絵本や手遊び、ピアノなどの実践や年齢に応じた子どもへの言葉かけなどについて、うまくできなかったというマイナスの評価が見られた。絵本や手遊び、ピアノなどは事前の準備が可能なものであり、準備不足であったことが明らかな点である。この点については、実習指導Ⅰの授業内だけでなく、学内における担当教員とも連携した取り組みが求められる。しかし、マイナスに評価できたことも実習のなかで実施することができて初めて学生が実感したことであり、そのような機会をいただくことで次の改善点へと繋がるものあろう。なかには実習施設が忙しく部分保育、一日保育の機会が得られなかった学生も見られたが、できるだけ機会を得ることができるよう実習施設との連携も必要である。

そして、④部分実習については、うまくできなかったとマイナスの評価をしている学生が見られた。指導案の立て方や書き方については実習指導Ⅰのなかで学習する時間を設けており、立案した指導案

をもとに模擬保育も実施している。さらに、保育実習Ⅰのなかで部分実習に取り組んだ学生たちもいるため、ある程度の準備や立案が可能であったことは予想される。しかし、実際の子どもたちの様子に応じて立案することや計画に必要な準備物の用意、導入、展開の方法など幅広いシミュレーションが求められることを改めて明示している。この点については今後も実習指導Ⅰのなかで丁寧に検討していくことが必要であるとともに、実習日程があらかじめ明示されている学生は余裕をもって準備ができていることも明らかになっていることから、実習施設とのコミュニケーションを図りながら、このような問題点については協働して取り組んでいきたいと考える。

以上の考察から保育実習Ⅱの内容はおおよそ本学のねらいに即した実習ができていたのではないかと考えられる。しかし、実習に向けての基本的態度として必要とされる積極性が足りなかったと評価している学生もいた。実習における積極性の必要性についてはその都度伝えてきたことであったため、このような評価となったことについては残念なことである。この点については、今後学生一人ひとりに丁寧に対応し、その理由も明確にしながら実習に意欲的に取り組めるような方策を検討していきたいと考える。

本研究は実習後の学生の振り返りレポートから、学生の実習の学びとその評価について明らかにし、今後の事前・事後指導の充実に繋げていくことを目的としていた。保育士養成にあたっては机上の学びだけでなく、実践の場での学びである実習の意義は大きいものがある。2018年に改正された「指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について」における「保育実習実施基準」において、保育実習の実施について「保育実習の実施に当たっては、保育実習の目的を達成するため、指定保育士養成施設の主たる実施指導者のみに対応を委ねることのないよう、指定保育士養成施設の主たる実施指導者は、他の教員・実習施設の主たる実習指導者等とも緊密に連携し、また、実習施設の主たる実習指導者は、当該実習施設内の他の保育士等とも緊密に連携すること。」[5]と記載されているように、実習、保育士養成にあっては養成校と実習施設との連携及び協働が必須であることは言うまでもなく、これまでに多く指摘されているところである。養成校における実習指導を今後さらに検討していくとともに、実習施設との連携の具体的在り方についても今後の課題としたい。

引用文献

1　厚生労働省雇用均等・児童家庭局長「指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について」雇児発0331第29号，2015年３月31日．

2　一般社団法人　全国保育士養成協議会編「保育実習指導のミニマムスタンダード『協働』する保育士養成　Ver2」，中央法規，ｐ２．

3　前掲注２），ｐ３．

4　前掲注２），ｐ２．

5　厚生労働省雇用均等・児童家庭局長「指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について」子発0427第３号，2018年４月27日．

参考文献

・長谷秀輝「保育実習Ⅱの『振り返り』と『課題』についての一考察」『四條畷学園短期大学紀要』，第49号，2016年５月．

・福山多江子・永井優美「保育者養成における実習の意義―実習の振り返りから見る学生の成長（その１）―」『東京成徳大学紀要』，第48号，2015年３月．

・中里操・清水陽子・山崎喜代子・古野愛子編著「保育実習ガイドブック―理解と実践をつなぐ12の扉―」，ミネルヴァ書房，2017年．